

[ヒガンバナ（リコリス属）の不思議な来歴]

2012年8月 片山繁朗

リコリス属の中で最もポピュラーな種類であるヒガンバナは豪雪地帯を除く日本全国に自生が見られます。しかし必ず人里近くに限られています。人の住まない山奥には有りません。しかもヒガンバナは3倍体の為に種子が出来ません。従って人の手によって広まったと考えられます。では初めは何処から来たかと云いますと、縄文時代に中国大陸から人の手によって持ち帰られたと考えられます。用途は球根に含まれるデンプンを食用にする為です。もちろんヒガンバナは猛毒ですので、水にさらして毒をぬいて利用したと考えられます。そのご救荒作物として日本全国に広まったと思います。徳島県の山間部の村落では最近迄ヒガンバナを食べる風習が有ったそうです。

次ぎに考えられるのは、中国大陸の洪水時に海に流された球根が日本に流れ着いて広まったと云う説です。しかしいずれの説にしても不思議な事があります。中国大陸には種子の出来ない3倍体のヒガンバナと、種子の出来る2倍体のシナヒガンバナが自生しています。しかし日本に自生しているヒガンバナは総て種子の出来ない3倍体のみです。これは一寸したミステリーに思えてなりません。